

目的 今回、江戸時代以降の制作とみられる小袖及び帷子の解体修理を行う機会を得、それらの小袖類の各部分の裁ち方の形状を観察することができた。その結果、現在の裁ち方と相違する点がいくつかあげられた。小袖類は江戸時代中期に形が確立し現在に至っているといわれているのに反しその裁ち方に違いがみられたという点に着目して、現在の裁ち方との違いを考察すると同時に当時の裁ち本との比較を試みることにした。

方法 東京国立博物館及び本学所蔵の江戸時代以降に制作された実物資料の調査を行い、現在の裁ち方との相違点を検討した。また江戸時代に出版された現存する各種の裁ち本に記載されている裁ち方との比較を行った。

結果 江戸時代の裁断方法は現在の裁断方法に比べると複雑で残り布が多くであることがわかった。現在の裁ち方との大きな違いは、前身頃の衽つけ縫い代を裁ち落としている点と衽が実際の形に近い形状で裁断されている点があげられる。当時の裁ち本にも衽は実物資料と同様に身頃と縫い合わせる部分を斜めに裁断した柳衽が多い。また裂巾は9寸から1尺8寸までさまざまなものがみられた。このことから江戸時代は着物に使用される裂の織巾は決まっておらず、異なる織巾の裂から合理的に裁断するために前身頃と衽を組み合わせたものや衽どうしを組み合わせたものなど数種の裁ち方が考案されたと考えられる。現在用いられている棒衽の裁ち方が多くみられるようになったのは江戸後期からであるが、同時に前身頃の裁ち落としも減り縫い代を裁たずに始末する構成技法が必要となることや仕立て替えが可能となることなど現在の裁ち方へ移行する過程を確認することができた。